埋蔵文化財愛知

no.52

川原（かわはら）遺跡

川原遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて、巨大な墳丘墓のみで構成された極めて珍しい墓域が確認された。なかでも、今回の調査で発見された最も大きな墳丘墓は、長辺35ｍ×短辺26ｍの規模をもち、全国でも最大級のものである。また、この墳丘墓群の北西に位置する方形周溝状遺構は、この墓域全体の祭りを象徴する祭祀の場と考えられる（Ⅲ頁参照）。

遺跡調査速報

上品野（かみしなの）遺跡

瀬戸市上品野町
(財)愛知県埋蔵文化財センター

上品野遺跡は、品野盆地を北西に望む丘陵斜面から段丘端部に立地する。東海環状自動車道建設に伴う事前調査として平成８年度より実施され、縄文時代後・晩期の「ドングリピット」４基と縄文時代から近世にかけての遺物が出土する大きな谷状地形が検出された。

平成９年度（4000㎡）は新たに国道363号線改良工事が加わり、Ａ・Ｂ・Ｃの３調査区の調査を実施し、97Ｂ区では旧石器時代の台形石器が出土した。台形石器が出土したＳＸ01は、Ｂ区のほぼ中央で幅５m、地表面からの深さ１m20㎝から１m50㎝を測り、西側に傾斜した浅い窪地状を呈する。基盤である段丘は熱田層に相当する。右の台形石器は、チャート製で長さ４㎝５㎜、最大厚さ１㎝３㎜を測る。左は、下呂石製で先端が欠損し、現存長２㎝９㎜、最大厚さ５㎜を測る。この他に、掻器２点、使用痕のある剥片30点程、その他（石核を含む）200点程が出土した。出土した剥片は横長剥片で、石核の平面形態も横長薄片をとるために適した菱形状を呈しており、これらの資料から台形石器の製作過程を知ることができるものと思われる。また今回の台形石器の出土により瀬戸地域の歴史が旧石器時代後期初頭にまで遡ることが判明した。

（埋文セ　小澤一弘）

97Ｂ区ＳＸ01旧石器出土状況

97Ｂ区ＳＸ01出土の台形石器

松河戸（まつかわど）遺跡

春日井市松河戸町
春日井市教育委員会

松河戸遺跡は、名古屋環状２号線建設による事前調査により明らかにされた庄内川右岸の沖積低地部に広がる縄文時代～近世にかけての遺跡群である。

平成７年度より継続的に調査をおこなっている安賀地区は、約150mほどの幅をもち北東から南西方向に舌状に延びる標高14m前後の微高地上に形成され、周辺には湿地部が展開することが伺われる。遺構は大きく弥生時代前期と鎌倉～室町時代の２時期に分かれ、これまでのところ弥生時代前期の環濠が面的に検出されたことが注目される。環濠は旧河道を利用し、その両岸に２条の環濠とさらに外側に延びる１条の濠で区画する構造が確認されており、南北180m東西110mほどの規模が推定できる。

また、現在調査中のＤ区（4200㎡）では、旧河道内より弥生時代前期の遺跡としては尾張地区で初めての木製品が出土し、鍬、斧柄、杵、編籠、櫂、槽、高杯、その他未製品を含め約40点ほどが現在確認されており、今後遺物を含め弥生時代前期集落の在り方を解明したい。

（春日井市教育委員会　村松一秀）

97Ｄ区（ＳＤ75）遺物出土状況

97Ｄ区（ＳＤ75）槽・鍬出土状況

川原（かわはら）遺跡

豊田市鴛鴨町
(財)愛知県埋蔵文化財センター

川原遺跡は、第二東海自動車道の豊田ジャンクション建設工事に伴い、発掘調査を実施した。調査面積は12,500㎡である。

本遺跡は、矢作川中流域に形成された標高20m前後の沖積低地上に立地している。これまで縄文時代晩期の遺跡として知られていたが、正式な発掘調査は行われていなかった。現在までの発掘調査によって、縄文時代晩期から室町・戦国時代にかけて、断続的に続く複合遺跡であることが明らかとなった。

本年度の調査において、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての墳丘墓、祭祀遺構と考えられる方形周溝状遺構、墓域を巡る大溝などが発見された。見つかった墳丘墓は４基で、いずれも20mを超える巨大なものである。最も規模の大きな墳丘墓２は、長辺35m×短辺26mを測る。周囲には約10mの幅広い周溝を巡らせるが、北西隅では途切れて墳丘への開口部となっている。この周溝からは、矢作川中流域では初見となる銅鐸型土製品１点が出土した。墳丘墓の埋葬施設である主体部は９基確認された。主体部及び周溝から出土した遺物から、この墳丘墓が造営されたのは弥生時代後期前半（山中式前期併行期）と考えられる。このような巨大な墳丘墓としては、佐賀県吉野ヶ里遺跡・愛知県朝日遺跡などの存在が知られているが、いずれも弥生時代中期前半代の築造であり、弥生時代後期の社会においては、全国的にも最大級のものといえる。

また、これらの墳丘墓にかかわる祭祀の痕跡が各所で確認された。方形周溝状遺構は、これらの墳丘墓全体の祭りを象徴する祭祀場所と考えられる遺構である。そしてこの周囲からは、ここで行われた祭祀に用いられたと思われる土器を処置した土坑（ＳＸ０３）や土器の集積が見られた。さらに墳丘墓１では、墓前祭に関連したと考えられる土器処置場と、主体部への供献土器と考えられる二つのタイプの土器集積が見られた。いずれもこの時期の祭祀の様子を知る上で一つの資料になりえよう。

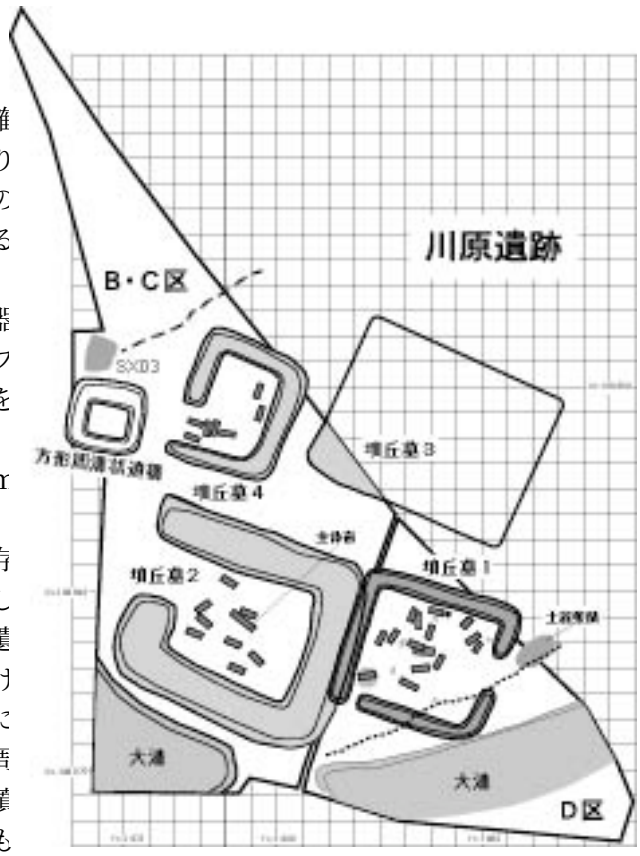
墳丘墓が造営された微高地の縁辺部には、幅20m～25mの大溝が巡る。

このように巨大な墳丘墓のみで構成された「墓域」の存在は、全国的にも極めて珍しい。これらの墳丘墓を造営した集団の居住域としては、近隣の碧海台地上にある神明遺跡が考えられるが、今日までの調査成果からは、これだけの規模の墳丘墓を造りえるだけの集団であったとは考えにくい。むしろ未だ発見されていない拠点的大集落が遺跡周辺に展開していたと考えられよう。さらには、これらの墳丘墓群を造営し得た背景として、矢作川中流域に影響をもつ特定の権力者の存在を想定する必要があると思われる。

（埋文セ　飴谷　一）

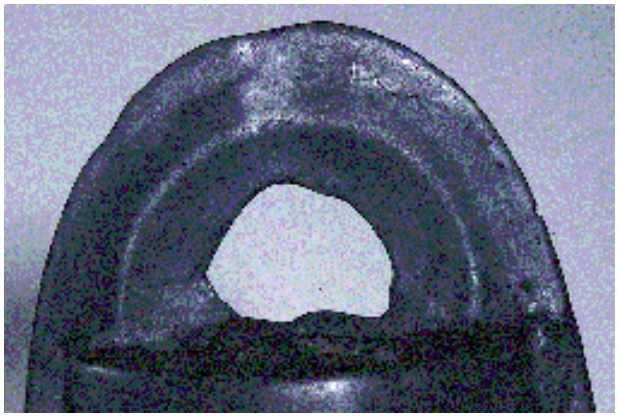
方形周溝状遺構と土器廃棄土坑（ＳＸ03）

祭祀用土器の処置場と見られる土器集積



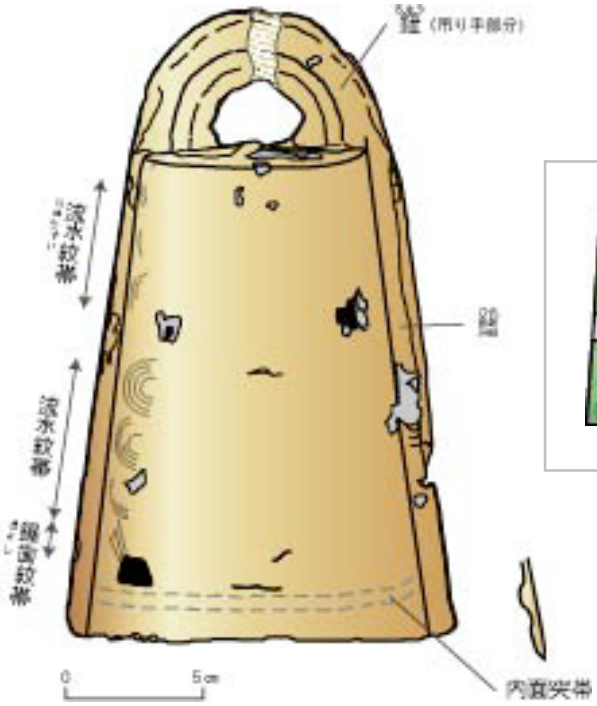
弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構配置図（１：1500）

八王子銅鐸

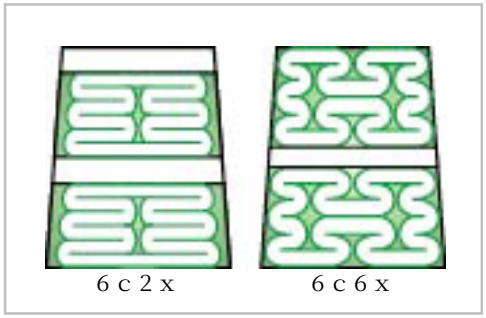


鈕に残る紐擦れの痕跡

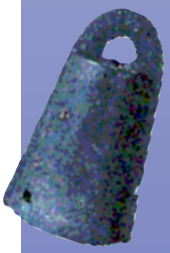
流水紋

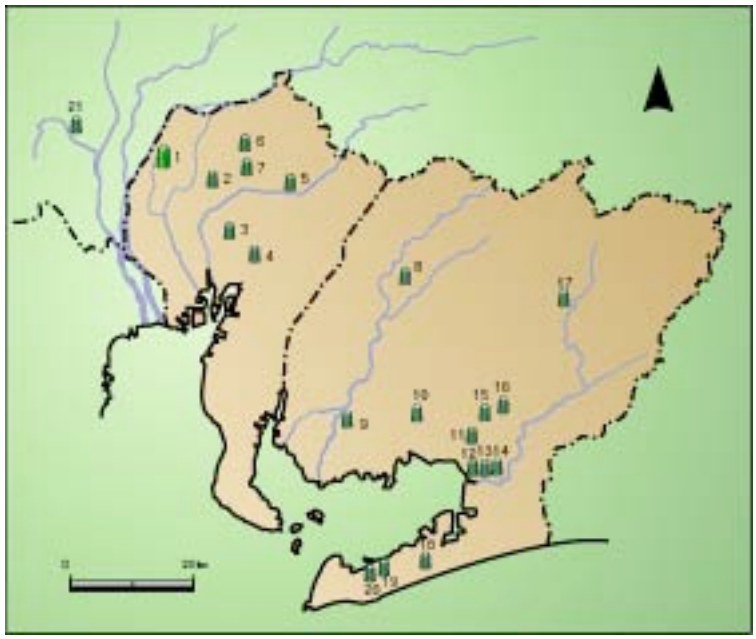


銅鐸実測図



流水紋の２類型





1　八王子
2　朝日
3　伝名古屋城濠
4　中根
5　神領
6　余野
7　外山
8　手呂
9　小島
10　法蔵寺
11　広石
12　伊奈１
13　伊奈２
14　伊奈３
15　平尾
16　千両
17　田嶺
18　掘山田
19　椛Ⅰ
20　椛Ⅱ
21　十六（岐阜県）

愛知県内銅鐸出土地一覧
（現存するものに限る）
［清洲貝殻山貝塚資料館　1991をもとに作成］

平成９年３月13日、一宮市大和町苅安賀の八王子遺跡96Ｊ区で、倒立状態で埋納された銅鐸が出土した。その後、周囲の土ごと本センターに持ち帰って銅鐸を取り出し、奈良国立文化財研究所でクリーニングと保存処理を行った。その結果、鈕に紐擦れの痕跡とみられる縦方向の光沢を確認することとなった。

器高21.6㎝（鐸身16.8㎝、鈕4.8㎝）、底径は長径11.3㎝（鰭間で13.4㎝）、短径7.8㎝で、重量は内部に若干の土を残した状態で814.9gある。

型式は鈕の形態から、外縁付鈕１式であることが判明した。ただし、飾耳の痕跡が鈕と鰭の境にあり、飾り耳の脚が鰭を貫いているようにみえることから、外縁付鈕１式のなかでは新しい要素をもっている。

発掘調査の時点では表面に土が固着していたために紋様は不明であったが、クリーニングの結果、鰭の付近でかろうじて流水紋を確認することができた。紋様構成は２区の流水紋で、下辺横帯にはＲ鋸歯紋を配する。中横帯は現状では無紋にみえる。上半部の流水紋帯は舞の直下から始まっており、上辺に横帯はない。流水紋帯は上・下とも両端部に３箇所の屈曲部をもつが、中央付近は磨滅により不鮮明である。

両端３箇所ずつの屈曲部をもつ流水紋のパターンは佐原真氏の分類によると、６c ２x と６c ６x の２通りしかない。うち、６c２xの流水紋銅鐸はいずれも上辺に横帯をもつ点を特徴としていることから、八王子銅鐸はこのなかに含まれず、消去法的ながら、６c６xであることが確定した。６c６xの流水紋銅鐸は八王子銅鐸を除けば、大阪府神於銅鐸、兵庫県桜ヶ丘２号銅鐸（以上同笵）、辰馬考古資料館412号銅鐸（出土地不明）の流水紋の一部の３例が知られており、いずれも外縁付鈕１式に属する。この６c６x流水紋は畿内南部（大和・河内・和泉）の弥生Ⅱ期（中期前葉）に属する壷に施された横型流水紋を銅鐸の器面に収まるように、この地域の工人によって創出された初期の流水紋である。八王子銅鐸も弥生Ⅱ期に畿内南部で製作された可能性がきわめて高い。また、銅鐸の鰭など数箇所に笵傷が認められることから同じ鋳型で作られた最初の銅鐸ではなく、２番目以降の製品であろう。しかし、現在までにこの八王子銅鐸と同笵の銅鐸は出土していない。

最初に述べた様にクリーニングの結果、鈕のほぼ中央に約１㎝の幅で帯状に縦方向の光沢が残っていた。これはＡ面・Ｂ面とも同じ位置についており、手で触れると周囲に比べて明らかにくぼんでいる。さらに、その光沢の帯の上端部と下端部もへこんでおり、しかも薄く尖っている。以上の状況から、これは銅鐸を吊り下げる際についた紐擦れの痕跡であろうと考えている。従来、突線鈕１式段階までの銅鐸が実際に鳴らした「聞く銅鐸」で、突線鈕２式以降は「見る銅鐸」とされ、なかに吊した舌と触れあって音を出す内面突帯の磨り減り具合がその根拠となっている。しかし、鈕の紐擦れ痕についてはこれまで報告例は皆無であった。八王子銅鐸も内面突帯が著しく磨り減っており、さらに磨滅は銅鐸本体の裾が尖るにまで至っている。佐原真氏の年代観に従えば、八王子銅鐸の鋳造時期は弥生Ⅱ期で紀元前２世紀頃、埋納時期が弥生Ⅲ期末～Ⅳ期初頭（中期後葉頃）で紀元前１世紀～紀元前後頃となることから、百年以上におよぶ長期の使用によって、内面突帯が著しく磨滅するとともに鈕にも紐擦れの痕跡が残るに至ったのではないかと思われる。また、鈕の下端部のみならず、上端部も磨り減ってくぼんでいることから、この部分にも力がかかる様な方法で紐が結ばれていたことがわかる。

これまで愛知県内では、尾張で12点（うち現存は６点）、三河で31点（同13点）、合計43点の銅鐸が出土したとされており、八王子銅鐸は44点目となる。小牧市外山の銅鐸と豊川市千両の銅鐸が外縁付鈕２式で最も古かったが、八王子銅鐸は外縁付鈕１式でこれらより古く、県内最古の銅鐸となる。東海地方では岐阜県大垣市の十六銅鐸が菱環鈕２式で、八王子銅鐸はこれに次ぐ古さである。大垣市が位置する西濃地域と八王子遺跡がある尾張北部地域は木曾三川をはさんで地理的に極めて近く、かつ濃尾平野の西端にあたることから、畿内から東海へ銅鐸が流入するルートとしてこれからも注目される。

（埋文セ　樋上 昇）

97年度現地説明会

今年は以下の７遺跡において現地説明会が行われ、毎回多くの方々に見学していただくことができました。

● ５月31日（土）**大脇城跡**（豊明市）　見学者230名

15～17世紀の城郭跡、堀、土橋などの遺構説明を行いました。また土器や陶磁器類のほかに、下駄や桶、曲物などの木製品、漆製品、石製品（五輪塔など）、銭貨（元祐通寶など）、鉄製品（刀など）と多種類の遺物が展示解説されました。

苅安賀遺跡 現地説明会

● ７月５日（土）**志賀公園遺跡**（名古屋市）　見学者290名

古墳時代～戦国時代の溝・住居地などの遺構説明を行いました。なかでも調理施設を持つ住居地などが注目されました。また須恵器（坏、高杯、甕など）や土師器（甕、高杯）などの出土遺物の展示が行われました。

● ７月26日（土）**郷上遺跡**（豊田市）　雨天のため中止

雨天のため古墳時代～江戸時代の溝・土壙などの遺構説明は行われませんでしたが、資料配布と土器・陶磁器などの出土遺物の展示は実施されました。

９月６日（土）**苅安賀遺跡**（一宮市）　見学者300名

弥生時代から江戸時代の溝・堀などの遺構説明を行いました。なかでも苅安賀城の外堀に関連すると思われる溝や水路が注目されました。土器陶磁器などの出土遺物の展示も併せて行われました。

● 10月４日（土）**権現山遺跡**（岩倉市）　見学者200名

弥生時代～古墳時代の溝・円墳などの遺構説明が行われました。中でも古墳時代後期の円墳が注目されました。出土遺物では円墳から出土した堤瓶をはじめ、土師器や陶磁器などが展示されました。

● 11月22日（土）**川原遺跡**（豊田市）　雨天のため中止

雨天のため弥生時代～古墳時代の溝・墳丘墓などの遺構説明は中止されましたが、高杯や銅鐸型土製品などの土器や陶磁器などの出土遺物の展示と資料配布が行われました。

● ２月11日（水）**下津北山遺跡**（稲沢市）　見学者400名

平安時代の寺院の区画溝や鎌倉・室町時代の屋敷地などの遺構説明が行われました。また出土遺物として、緑釉円塔などの土器や陶磁器などの他に、ひとがたなどの木製品も展示されました。

資料公開

清洲城下町遺跡の石垣に墨書発見！

９７年度の発掘調査時に出土した石垣の石を保存のため取り上げて調査したところ、３点から「雑賀」（「さいか」もしくは「さいが」）と書かれた墨書を発見しました。「雑賀」以外にも「六十五」と書かれたものが１点あり、判読が困難なものを含めると合計１０点の墨書が発見されました。これだけ明確な石垣の墨書が発見されたのは、昭和５９年度来の清洲城下町遺跡の発掘調査では初めてであるとともに、清須城の本丸の石垣に当たることから、清須城築造の過程を考えるうえで貴重な資料といえます。

石垣に書かれた墨書

埋蔵文化財愛知　　no.52
発行　平成10年３月31日
編集　財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017
愛知県海部郡弥富町前ケ須新田字野方802-24
TEL 0567-67-4161～4163　FAX 0567-67-3054
印刷　クイックス